



岩江中だより

第24号
 発行日:平成26年10月23日
 発行:三春町立岩江中学校
 電話:0247-62-8290
 FAX:0247-62-8380
 E-mail:school@iwae-jfks.ed.jp

学校経営基本方針『こころ豊かに』～共に語り合い、共に学び合い、共に成長する学校～

【自慢の子どもたちです。～落ち葉を掃いて心もきれいに!～】

わが校の自慢は、これまで何度もお伝えしてまいりましたが、右の写真によく表れています。他の人が見てもいなくとも、自らの仕事や役割に真剣に取り組める子どもたちがたくさんいます。朝の登校指導をしながら、生徒昇降口に目をむけると、竹ぼうきを持った男子が先生と一緒に一生懸命落ち葉を掃いていました。



植木鉢の花に水をあげる子、トイレのスリッパをそろえる子、傘置き場の傘をきれいにそろえる子、横断歩道で止まってくれた車に振り返ってきちんとお礼のあいさつをする子、お年寄りの荷物を、「持ちます。」と言って持ってあげる子、人が見ていようがいまいが正しいと思うことはやり遂げる姿勢が随所でみられる岩江中学校です。

【秋の一日をみんなで楽しみました!～全校レク・芋煮会を開催しました。～】

午前中に全校レクリエーションをし学級対抗の長縄とびや八の字とびに汗を流しました。全員の心と体を合わせないと長続きしない縄跳びで大いに盛り上がり、学級の団結を強めました。

午後は、お待ちかね、芋煮会!調理班とかまど班の2つに分かれ、具材の下準備や薪割り・火焚きに精を出していました。完成した芋煮はみんなで分け合い、中には、よその班の分も味見をしてくれる人もいました。



【色づく秋、実りの秋を迎えました。～いい季節になりました。充実の秋へ!～】

10月5日(日)に、伊藤会長さんと一緒に、第62回福島県PTA研究大会須賀川大会に参加してきました。わが岩江中学校チームは第3分科会「家庭と学校教育との関わり」分科会に参加しました。第3分科会のご講演は、奥羽大学講師で臨床心理士の鈴木敏城先生の「児童生徒を育てるチームとしての家庭と学校」という演題のお話をお聞きしました。家庭と学校がチームを組んで子どもたちを育てていこうという内容でした。以下にその講演の概要をまとめてみました。よりよいチームにむけてどうすればいいのか今後の岩江中学校PTAの在り方について参考にしていただければ幸いです。



【第62回福島県PTA研究大会須賀川大会第3分科会講演概要】

演題「児童生徒を育てるチームとしての家庭と学校」(要約)

講師 奥羽大学講師・臨床心理士 鈴木敏城 先生

社会にはさまざまな人と人とのつながりがある。その中に「組織」と「コミュニティー」がある。組織とは、目標・使命・役割などを共有し成果により社会に貢献しようとするつながりであり、コミュニティーとは、互いに知り合いであり助け合って安全と成長に責任をもとうという共同体のことである。

組織ではルールが大切であり、コミュニティではリレーション（人間関係・つながり）を大切にす。ただし、優れた組織はルールだけではなくリレーションも大切にす、一方、優れたコミュニティはルールも重視しているものである。つまり、「ルールあるリレーション」こそ優れた「つながり」の条件となってくる。

子どもたちをよりよく育てるため、家庭と学校が協力・連携し、チームとして機能するためにはどうしていったらいいのかについて考えていきたい。そのためには、まず、子どもたちのことについて理解しなければならない。子どもたちは10歳頃になると「自我」が固まりはじめる。思春期と呼ばれる時期がその時期にあたり、子どもたちは、「これでいいの、生きていいの、僕って何、人生って何？」という思春期特有の葛藤に満たされる。大人はいろいろな自我を確立して使い分けができるが、子どもたちは一つで悩んでいることから、場に応じて使い分けをする大人を“汚い存在”としてみてしまう。人間は生き物の中で唯一自分の存在を疑える動物であり、疑う気持ちも大切である。ただ、人間の思春期は社会性も発達していく時期であり、自分が何なのか理解できず悩んでいる自分とその自分を理解してくれない他者がいて、それが本人にとって大きなストレスとなってしまう。ストレスと聞くと悪いものばかりと考えがちであるが、ストレスには、よいストレスと悪いストレスがある。よいストレスとは、心の発達を促すストレスであり、壁を乗り越えることにより成長していくことができる。しかし、壁が高すぎてしまうことでその壁を乗り越えられないことにより悪いストレスに変わる。それが悪いストレスである。何がよいストレスであり、悪いストレスかは人によりさまざまである。何をストレスと感じるかが人によって違うように、ストレスの解消方法も人によって変わってくる。ストレス解消を他者を攻撃して解消する人もいて、それがいわゆる「いじめ」と呼ばれる行為である。「いじめ防止対策推進法」によれば、いじめとは、「当該児童生徒と一定の人的関係にある他の児童等が行う心理的又は物理的な影響を与える行為であって、当該行為の対象となった児童等が心身の苦痛を感じているもの」と定義されている。「いじめ」行為への対応には、いじめる側の心の構造に目をむけた対応が必要となってくる。いじめの分類としては暴力系とコミュニケーション操作系のいじめがあり、いじめの形態としては排除のいじめと取り込みのいじめというものがある。いじめのプロセスと支配の構図であり、いじめる側がいじめられる側をコントロールする過程とも言える。いじめへの介入は、いじめる側の子ども「遊び」という言い訳をさらに追求する大人の論理性が必要であり、詳細で個別的な事実確認とグレーゾーンを作らない矛盾点の追求が欠かせない。

日本の学校の特徴は、学級集団の中で生活指導と学習指導が同時並行的に行われ、学級状態が安定していれば生活力も学力も相乗的によくなる。逆に、不安定な学級状態では意欲が下がり生活力も学力も低下する。学級集団には発達段階があり、第1段階：混沌・緊張期、第2段階：小集団成立期、第3段階：中集団成立期、第4段階：全体集団成立期、第5段階：自治的集団成立期の5段階である。学級集団が第5段階：自治的集団成立期にたどり着くためには、○不安と緊張の解消、○ルールの定着、○リレーションの定着、○役割の達成、○リーダーシップの育成、○フォロワーシップの育成という課題があり、ルールのあるリレーションのもと、学級がコミュニティに成長していくことになる。そこで、家庭の協力が必要になってくる。リレーション（人間関係・つながり）とルールの基本は家庭で身につけるものである。あいさつ、ありがとう、ごめん、相手が謝ったら許してあげるなどは基本的リレーションであり、時間を守る、人のいやがることはしないで我慢する、わがままを抑え仲間と協力するなどが基本的なルールといわれるものである。それらは、学校と家庭との連携のもとでさらに育ち確実なものとなってくる。家庭と学校との連携のポイントは「ほめること」である。人は環境の中で成長する。家庭も学校の児童生徒にとっての成長のための環境であり、それは児童生徒のパフォーマンスに大きく影響する。家庭で認められれば学校で安定し、学校で認められれば家庭でも安定する。プロセスを認めほめることが大切であり、だからこそ、家庭と学校が連携しなければならない。

子どもたちが満足できる家庭づくり・学級づくりでいじめは減少してくる。そのためには子どもたちと関わる大人の集団（教職員・PTAなど）も満足感に満ちた状況でなくてはならない。そんな満足感にあふれた大人の集団である家庭と学校がチームになるためには、○同じ目標をもつこと、○役割分担をすること、○互いに認め合い支え合いながら行動すること、○行動の成果を確認し新たな目標をもつことが大切となってくる。具体的には、「○同じ目標をもつこと」では、はじめは小さな目標からはじめ、具体的目標、行動できる目標、結果が数字で表せる目標がよい。「○役割分担をすること」では、役割は多い方がよく、役割ごとに内容が明確で、リーダーシップとフォロワーシップが育ち、さまざまな役割をメンバーが体験できるとよい。「○互いに認め合い支え合いながら行動すること」では、よく話し合ってから行動し、できるところから行動し、互いに支え合って行動し、認め合って褒めあって行動することがよい。「○行動の成果を確認し新たな目標をもつこと」では、曖昧な言葉でなく数字で確認することで、探せばよい数字が必ずあり、悪い数字は次の目標にするといふ。ということが言える。

おしまいに、家庭と学校が協力・連携しチームとして子どもたちをよりよく育てていくために、その心構えとして、「ゼロか100かで考えないこと」、「決してあきらめないこと」、「相手に無理を押しつけないこと」、「目標だけを見ないこと」があげられる。取り組むものが意欲をもてるよう、努力したプロセスを見、そのプロセスを大切にしていきたいと思います。

